

サウーデ教会女性部会報

2014年 8月 N° 279



もくじ

ページ

● 巻頭言 「聖霊が下る」	丹羽昭男	②
● 特集 「救いのあかし」	山内敏子	④
	増田メリー	⑤
	中島ますみ	⑦
	中山美智子	⑧
● あかし	中山美智子	⑨
	蛸井恵子	⑪
	謝敷宗光	⑭
● 個人消息 お知らせ		⑮

巻頭言

丹羽昭男 師

「聖霊が下る」

使徒行伝 二章一〜四節

「1」序論

2000年前、ペンテコステの日に弟子たちの上に聖霊が下った。弟子たちは新しく作り変えられた。そして、救い主イエス・キリストの証人として立ち上がった。

今日、生きる私たちクリスチャンもまた、この弟子たちが経験した経験をすることができ。では、一体どのようにして聖霊は弟子たちの上に下ってこられたのか。

「2」弟子たちの準備

聖霊が下ってこられることは全く神のみわざである。しかし、弟子たちの方でも準備が必要である。第一に、「罪の徹底的な告白」をした。第二に、み言に従えない自分たちの弱さを知って、どうしても「聖霊に満たされたい」と懸命に、真剣に祈り求めた。

「3」天から下ってこられた

そこに聖霊は下ってこられた。どこから下ってこられたのか。「天から」であった。キリストが天からこの地上にこられたように聖霊もまた、天―神のみもとからこの地上にこられた。キリストが十字架において救いのみわざを完成され、復活して、天に帰っていかれた後、キリストに代わる助け主として聖霊は下ってこられた。

【4】炎のように

聖霊は「炎のように」下つてこられた。炎は火である。聖霊は火である。火は全てのものを焼き尽くす。聖霊が弟子たちの上に下つてこられることにより、彼らの中にあつた全ての罪や汚れを焼き尽くされた。特に、自分こそ一番偉いのであるという心の中の「高ぶりの罪」を焼き尽くされた。

【5】激しい風のように

また、聖霊は「激しい風が吹くように」下つてこられた。風は「息」「命」である。神の息。神の命である。キリストの復活の命である。聖霊が弟子たち一人ひとりの内に下つてこられたという事は、彼らに神の命が注ぎ込まれたことである。このことによつて、彼らは全て新しくつくり変えられた。そして、神のみ言に従つて生きるものとされた。

【6】一人ひとりの上に

聖霊は弟子たちの集まつている所に下つてこられ、占領された。いや、場所だけではない。そこに集まつていた弟子たち一人ひとりの中にこられた。全員である。一回である。そこに集まつたもので聖霊に満たされない弟子は一人もいなかった。皆が聖霊に占領された。

【7】結論

今日もまた、その通りである。聖霊は真剣に求めてくるものには必ず占領して下さる。一人ももれるものはない。あなたや私の中にも聖霊はきてくださり、占領して下さる。その時、私たちは2000年前の弟子たちのように新しくつくり変えられる。そして、キリストの証人として力強く生きるものとされる。



特集

救いのあかし

とくしゅう



信仰の道へ導かれた
きつかけから現在について
お話をうかがいました

やまうちとしこあね
山内敏子姉



受洗日 2011/4/24

- *娘に紹介され自宅そばのサウデー教会へ
- *教会内は全話も聖書も日本語で安心できた
- *教会という場所は初めてだったが、先生方のお話は分かりやすく、皆さんに親切にしていただき嬉しくなった
- *それから毎週、行くようになる
- *子供たち（カトリック信者）が、とても喜んで

でくれて聖書や必要なものを揃えてくれた

*それから半年後、先生に洗礼を勧められる

*しかし、長年、浄土真宗を祭っていたので、

仏壇などどうしたら良いかと先生に尋ねると、

「そのまま構わないですよ」と言っていた

き安堵して受洗することに

現在では、

*心が温かく、幸せな気持ちを保っている

*難しいことは考えず、素直な気持ちで朝晩、

祈っている

祈りの課題

*子供たち家族のこと



何より先生の心安らぐメッセージが聞けて、皆様とのお交わりも嬉しいから、「礼拝は休みたくな

いんです」と敏子姉。「先祖代々からの仏教徒でした

が、クリスチャンになったことは後悔していません。朝晩、主の祈りをささげて、この幸せな日々に感謝しています」と断言される。加えて、「私はこれ以上の幸せはいりませんから、何の心配もかけないで仲良くしてくれている子供たち家族のことをどうぞ守りください」と、祈られている。

何度も「幸せ」と口にされたが、そこには過ぎ去ったものにも苦勞にも目を留めず、ただ、目の前のイエスさまだけを一心に見つめ、「自身の信仰の歩みをすすみ行こう」との強い思いを感じた。



祈りの課題

* 教会から離れてしまっている娘たちを見守って欲しい



「突然、母を失って、これから思うと恐ろしくて泣けなかった」と、当時を振り返る増田姉は、「信じていた神様を憎んだときもありました。その時は2歳に満たない双子の弟たちもいて、うちには母親が必要だったのです。ただ、今思えば、母が生きていたら私はクリスチャンになっていなかったのではないか。いろいろな事があってベレンからサンパウロに来て、サウーデ教会を知ることになった。その為に神様は母を連れて行ったのかもしれない」。そう思えるようになったという。「母の遺品の靴を開けたら、真っ先に日本語の聖書が出てきたことを思い出す度に、その導きを感じる」そうだ。

増田メリー姉  受洗日 1968年

* 祖父、父は仏教だったが、母に連れられ幼い頃より教会へ

* 14歳のとき、身重の母が落雷で亡くなる

* 一つ上の姉と、家事や6人の弟たちの面倒を見ることに

* サンパウロへ出て来てから、叔母(原田泰子姉)に子供を日曜学校へ連れて行くよう頼まれる

* その一年後、叔母や作間牧師の娘さんに勧められ、サウーデ教会にて受洗

* 夫もカトリックから同教会へ移ってくれ、家族で教会生活を続ける

現在では、

* いつも災いから守ってくださっている神様に感謝の祈りをお捧げしている

増田姉はこれまでに数々の奇跡のような体験されている。「家族で日本へデカセギに行った際、夫に仕事がなくなくなり落ち込んでいた。そんな時、「教会へ行ったら仕事が見つかる」という、頭のとっぺんからつま先まで響き渡る声を聞いた。そこで、夫に教会を探させ行くと、翌日、仕事が見つかった」続けて娘さんの上にも同じような事が起きた。他にも、父親の病氣や知人の死を夢で知らされたこともあるという。今も様々な体験を通し、主との交わりを深めておられる。



中島ますみ姉



※お世話になっていた伝道師の仲介で、父の入院中、家族全員でカトリックの洗礼を受ける

※それから、神様を信じて結婚の後までカトリックの教会へ通う

※夫からサウデー教会を熱心に勧められる

※夫と同教会へ行くことを決意し、長田師より洗礼を受ける

現在では、

※朝のデボーション、祈りを欠かさぬように

※病気の際には心細い時もあるが、主に祈るといつも共にいてくださっていることが分かる

つて平安でいられる

祈りの課題

※海外で離れて暮らす一人娘の健康と、良縁



「娘は長く海外で生活を続けながら牧師になって、更に勉強や奉仕に忙しくしている。3年前に夫を天に送ってからは一人だが、全然寂しくはないです。私には神様がいてくださっているのだから、私には神様がいてくださっているのだから、明るい声でそう話しますみ姉。それは、辛い出来事を通る度、涙ながらに祈った祈りがきかれた経験が多くあるからだという。ますみ姉はなかなか子供が授けられず、授かるようにと教会で長い長い祈りを涙と共にささげていた。あるとき、可愛らしい小鳥が目の前に止まりしばらく目があつた。後日、検診に行ったら妊娠していた。その子を出産するとき、45歳という高齢だった為、元気に育ってくれるだろうかと心配し祈ったそう。更には出産直後、対応の悪い看護婦に無下にされている我が子を見て本当に悲しく辛かった。しかし、同病院で昔、父が

お世話になっていた看護婦さんが突然、訪ねてきてくれた。聞けば、父が死ぬ前に、「娘の出産時には頼みます」と言付けていたらしい。既に定年になっていたその人は、知人の看護婦の連絡を受け駆けつけてきてくれた。それから、うんと対応が良くなったのだとか。「父の祈りがきかれたんだと思います」。

毎日のように電話をくれる娘さん。「今は、娘も祈ってくれるので心強く安心です」と、いよいよ、祈り中で主に近づかんと願われている。

主よ、みもとに 近づかん (新聖歌510)

主よ、みもとに 近づかん

のぼる道は 十字架に

ありとも など 悲しむべき

主よ、みもとに 近づかん



中山美智子姉



受洗日 1946年

※6歳で渡伯。文化植民地の第二期として入植

※14歳でホーリネスの田名網牧師のところまで寄宿舎生活を始める

※毎朝のデボーション、祈りの信仰生活が日常となった

※ごく自然のこととして19歳で受洗

※結婚し、姑は熱心な仏教徒、夫は無神論者だった影響で教会から遠ざかる

※よい家族だったが、それでも辛いときには、祈ると御言が心においてきて慰められた

※夫も亡くなり、知人の葬式で国文広子姉と再会し、「この日曜日に教会へいらっしやいな。待ってるわよ」と声をかけられ、すぐさまサウデー教会へ

現在では、

*奉仕や人の役に立つことは難しくなってきた

ので、すべて主におゆだねしている

*主が私の罪を赦してくださいから、

私も人の罪を許せるようにと毎朝祈る

祈りの課題

*二人の息子家族の健康と、彼らが常に正しく

あつて欲しいと願う



「クリスチャンホームで生まれ育ち、信仰生活は特別でなく日常のことだった。しかし、結婚で教会から離れ、また戻された。神の御業はとうとういよいよ、また戻された。神の御業は到底表現できぬ深いものがあり、感謝の他ない」そう語る美智子姉は、どんな時も御言によつて慰められてきたという。「違う家族に入つて、難しいこと辛いことはそれなりにあつたけれど、主は共に

感謝の祈りを捧げてくださったことを、今でも嬉しくおもいだします。渡伯後の文化植民地では現在まで親しくさせていただいている多くの信仰の友たちと出会いました。その方々は再び教会生活に戻つた私をとても喜んでくれました。その内の一人、菅原ミヨノ姉からはその思いをつづつた手紙をいただき、今も大切に聖書に挿んでいます。「信仰の友」とは、いつまでも気兼ねなく素直な関係でいられるのがいいと思います。

夫を亡くし、20年ほど経ちますが、夫婦は一番の家族なのだろうと思います。たとえ返事をしてくれなくても意志を伝え、聞いてくれる唯一の相手です。その夫が今はいない。年をとればとるほどその必要を感じずにはいられません。どんなにきれいな事と言つても寂しい日はあります。人間とはなんと弱いものなのでしょう。いえ、人間ゆえに弱さがある

いてくだり、気持ちの奥底には御言があつた。こんなからし種のような小さき者のことをも忘れないでいてくださっていることを示され力となつた」美智子姉は、行く道を守つてくださる主と共に、御言の導きによつて生かされている今を感謝されている。

あかし



かみとも 神共にいまして



なみやま みちこ
中山 美智子

私はアメリカで生まれ、クリスチャンだった両親の元に育ちました。3歳の時、母と兄弟たちとで日本へ行きました。大阪の日曜学校で、牧師夫人が献金を集め回つた私を胸に引き寄せ、

つて、誰にでも他人には言えない十字架があるのだと思います。だからこそ、悩みの重さはその本人にしか分かりませんから、それらにどう向き合い前向きに生きるべきか考えさせられます。一昨年、姉が半年間の入院生活を送つた際に出会つた医師に「患者の家族がクリスチャンだと医師として理解してもらえると」と言つておられました。また、知人の息子さん（医師）も、「クリスチャンの患者は違う。明日ということを理解し、明日を恐れな」と話しました。つまり、今日を十分に全うしようとしている姿がそこにはあるそうです。それらの言葉に私は深くうなずきました。今では一人暮らしの私ですが、決して独りではないのだといつも示されます。心の奥底の奥底に心強いものが私にはあるからです。どんな時にも祈ることができる。全てを主にもつていくことができる。そして、主の時を静かに待

つことができるとは、
教会を離れたときでも
こうして私は信仰を保
つてこられました。感謝
です。



「天国は、一粒のからし種のようなものである。
ある人がそれをとって畑にまくと、それは
どんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の
中でいちばん大きくなり、空の鳥がきて、その
枝に宿るほどの木になる」

マタイ13・31と32

この御言は苦難に日に与えられたものですが、
私にとっての出発点であり、また終点です。

創世記32章
長い間、疑問に思っていたエサウの思いを知るこ
とができた。彼はヤコブに対する殺意をもちや持つ
ていなかった。一方、ヤコブは、神様の約束を確認
しながら、それでも兄を恐れてあれこれプレゼントを
工夫したりしている。信じきること、委ねきること
の難しき。しかし、ヤコブはヤボクの渡しにおいて
神様からもすごいお取り扱いをしていた。だいた
何が何でもという強い執念を持って神様の祝福
を求めるヤコブの姿。この一晩のうちにヤコブ
(奪い取る)から、イスラエル(神の皇太子)に変え
られた。神様の前で自分自身を、その生き方を
徹底的に見直し完全な悔い改めに導かれたヤコ
ブの幸せ。物欲に凝り固まっているように思っ
ていたヤコブ、実は何よりも誰よりも神様を求める
人であったことを知る。

みことば日記

蛸井 恵子

創世記31章

「あなたは愚かなことをしたも
のだと言われることのないように…」
今朝の早朝祈禱会の最後、美香
先生のお祈りを聞いてハッと胸が
突かれる思いがした。わたしの
人生は思い出すのも恥ずかしい、
冷や汗が出るような愚かなことの連続だった。心の
底に「どうせわたしなんか」という思いがいつもあつ
て、投げやりでいい加減な生き方をしてきたのかもしれない。
自分のことも周囲の人のこともまじめに
考えて生きてきたのではなかった。今からわたし
は変わらなければ。しっかりと丁寧に自分に向き合
って生きていこう。このお祈りの言葉をわたしの思
いとしていこう。

マタイによる福音書7章

- ①わたしは人を裁いていないか。
- ②わたしは人の能力を押し量る
ようなことをしていないか。
- ③わたしは周囲の人の行動の
よし悪しにこだわっていないか。
- ④「聖なるものを犬にやるな」
「真珠を豚に投げてやるな」
とは、人間をさして犬や豚にたとえて
いるなら、それは第1節の教えに背く
ことではないかしら。でも、生きることはきれいごと
ではないから、こういうことはあるのかも知れない。
- ⑤求めよ、捜せ、門をたたけ、希望をもつて、
どこまでも。
- ⑥「何事でも人々からして欲しいと望むことは、
人々に対してその通りにせよ」



これが律法であり、預言者であるとは。

⑧狭い門について。
日本では一般的に人が狭き門という場合、多くの人が目指す「社会的な成功への道」、または、「経済的に安定する道」である。だれでもが望みに憧れる堂々とした広い道に見えるけれど、多くの人が殺到するためにその結果、狭き門となる。して、本当のわたしはどちらの道に行きたいのか？ 自分で自分に問うている。

⑨天国に入れていただきたい。
わたしは天にいますお父様の御旨を行っているか。岩の上に自分の家（自分の人生）を建てたい。

テモテへの第一の手紙4章
①礼拝には必ず祈って霊的準備をしてから出席することを教えていただいた。わたしは今まで



「お祈りを当てられたらどうしようか」と、そんなことばかりを考えて、その為に祈ったことはあったけれど、それ以外のことでは祈ったことがなかったと思う。これからは必ず祈ってから出掛けよう。礼拝だけではなく集会のときも、祈禱会のときも祈って出席しよう。

②祈る姿勢を教えてくださいました。面倒なことは早く済ませてしまおうと、とにかく形だけでもいいから祈ってわたしの義務を果たそう、そういう思いや態度では駄目だと指摘していただいた。今、自分は何を思い、何を願ひ、何を心配しているのか、自分の心を占めているものは何なのか、そういったことを全てイエス様を通して神様に申し上げることが大切だと教えていただいた。自分の心を見つめ、思いをイエス様に集中して、ごまかさずに本心から自分の言葉で祈ることが大切だと教えていただいた。

ごあいさつ

むねみつ 宗光
じゃしき 謝敷

まず初めに、こうして今回の会報に手記を書かせてもらったことに感謝申し上げます。タイミング的にお別れのあいさつ風になりました。

私は2012年6月に沖繩から永住覚悟でブラジ

ルへ来ました。ブラジルへ来た当初は既に救われていた妻や娘たちの付き合いで、あまり気乗りもしないでポルトガル語で説教をする教会へ通っていました。早く洗礼を受けてほしいという家族の期待と、意味も分からず洗礼を受けてよいものだろうか、というジレンマ(葛藤)の中で悶々とした日々を過ごしていました。ある日、時々通っていた教会の日系人の友人から100パーセント日本語で説教をしてくれる教会があることを知り、翌週には当

サウデー教会を恐る恐る訪ねる事になりました。ご縁とは不思議なもので、当教会を教えてくださいました日系人というのが須山フミ姉の息子さんでした。本教会へ通い始めてすぐから、丹羽先生、美香先生の説教、そして先輩兄弟方の証やお祈りがだんだんと心に迫ってくるようになりました。そして約半年後の3月31日に丹羽先生の指導や家族のすすめもあり洗礼を受けられることとなりました。思えば日本に住んでいたときにも気が向いたときには教会へ行ったりはしていましたが、家族との付き合い程度の気持ちだった気がします。62才で救われたのですから、いぶん遠回りをした気もしますが、私に引き続いて妻の父親も80才で救われたのですから、ここブラジルのサウデー教会で救われることが神様のお導きだったのかもしれない。今月の8月25日には諸般の事情で日本に帰る

ことになりました。丹羽先生を初め多くの兄弟方からいつばいのご指導と愛を受けながら、何のお返しもできずに去っていくのは、心さびしく申し訳ないという気持ちでいつばいです。でもそれもまた、私に対する神様の御心のような気がします。

日本へ帰ってからの生活も未知数ではありますが、与えられた環境の中で精一杯頑張ろうと思っております。そして、今日まで教会で教えていただいた教えを胸に、信仰生活もおろそかにすることなく精進したいと思っております。

今までのご指導、お付き合い、本当にありがとうございます。



「祈り」
三浦 綾子 / 作家
(1922~1999)

神よ
人生は 一人 林を
歩み行くようなものかも
知れません
自分の前には
何の道もなく
また 自分の後を
従っていくる者も
ありません
そんな辛いものかも
知れません
でも、どんな辛い道でも
主が手を引いて下さるなら
私たちは 安心して
生きて行けるのではないのでしょうか



何十年かの 人生の中で
人は幾度 大きな 重荷を肩に負い
おろし また負って
来たことでしうか
でも 主と共に在すならば
ああ 本當に共に在すならば
それは 何と 幸いな
人生であることでしょう



* 熟年研修会 (連盟主催)
10月11日 (土曜)
11月1・2日 (土日)
* 教団年会
北米よりローレル・ビショップ (監督)
をお迎えして年会がもたれます

なお、すべての詳細は順次、週報でもお知らせいたします。それぞれの集会が祝されますよう、どうぞお祈りください。

個人消息 しょうそく
* 召天者
竹田トヨ姉 7月8日 (享年92歳)

お知らせ
* 連合女性会・例会
第1部 / 例会 11月30日 (第5)
第2部 / 交わり会

あしがき
今回の会報も皆さまへの励まし、また、新たな魂の救いへの導きに用いられますことを願いつつ、お寄せくださいました方々に感謝申し上げます。
(おばら)



<http://saudekyoukai.jimdo.com/>

会報や礼拝メッセージ、
教会の様子をご覧いただけます